

## 《選評》 いしい しんじ (作家)

非常に盛り上がり、充実した選考会となった。まるで会自体が物語のようだった。作品のレベルがあがったことに加え、読者選考委員の積極的な参加、肝のすわった発言、文学を愛する力に、賞自体が引っぱられ、あらたなステージに浮かびあがった観がある。



『凶都夜話』。小説を書く力量ではピカイチ。ストーリー展開やセリフによって感動にもっていかれる、という作品でなく、ただただ、特異なその文体で読ませる優秀作。「京都らしさがない」という意見があったが、家や建物が意志をもち、住人に働きかけてくる、という実感は、この町に住んでいてたしかにある。家とバーのあわいにひろがる時間・空間で、ひとの不思議な縁がつながれる、という構成も、京都ならではかもしれない。掌編の一話一話がその「あわい」の域内で語られ、その範囲をはみだすと、どの作品もいきなり「ストーン」と終わってしまう。そこがおもしろくもあり、物足りなくもある。「脚立」の使われかたはマジ最高だった。

『祇園の矜持——モルガンお雪』。これだけの長編に正面から向き合い、最後まで描ききった。風俗や史実、発言まで、よく調べあげたものだと敬服する。ただ、たとえば祇園の場面など、調べたことばを表面に並べすぎたため、かえって作り事めいて、場所の深みが見えにくくなってしまった。

また、理不尽に連れてこられた「尋問」の形式で、お雪の過去があきらかになっていくわけだが、それならば、「尋問」に召還されるその理由が、物語の底に力強く根を張ってなくてはならない。なのに今作では、その事情をめぐる叙述にあまり説得力がなく、いわば根がぐらぐらして、残念ながら、物語全体を支えきれていない。長い執筆の最中、視線が細部にいく余り、全容がみえにくくなっていったかもしれない。読んでいて、ことばにストレスを感じることはまったくなかった。短い歴史ものなど、ぜひ新作を読ませていただければと願う。

『鴨川の水面に光るのは』。離れ業のようなプロットをたて、それを滞りなく、おもしろく読ませようと、全体、細部に目を配って、ていねいに書きつづっていく息づかいに好感をもって読んだ。ただ、最終的に、プロットだけがいきいきと立っていて、その上に乗る人物たちがみな平板に、影絵のようになってしまったのが残念だった。どんでん返しで驚かせ、読後のカタルシスと呼ぶ小説はたしかに存在する。が、奇抜なプロットは、そのしかけを明かして驚かせるためでなく、あくまで、人間の喜び、かなしみ、怒り、嫉妬、幸福、それらを読者の予想をこえた、新しいかたちで伝えるための手立てであるべきだ。語りの才覚は随一。次作に期待します。

『つじもり』。とちゅう、いやラストまで、たいへんおもしろく読んだ。これが受賞で決まりか、と思ったくらいだ。だからこそ、ラストの失速は、こころから残念だった。腰を浮かせ「なにをしはんねんな」と叫んでしまった。

ことばの強弱、物語の遠近、視点の自在さと、候補作中もっとも安定し、ある種「手練れ」も感じた。主人公のちょうどいいだらしなさは魅力的で、自然と応援したくなっている。老人たちの顔も、ていねいに描きわけられ、同じ年ごろなのに、ひとりずつ声までちがって聞こえる。著者は、みずからを通して物語の上にあらわれた人物たちを愛し、敬意をはらって、ていねいに描いていく。そこにこそ、こころを動かされる。

最後の「穴」の解決場面で、著者はその敬意をふりしぼって、真摯にことばを重ねたろうか。「森本」の登場、その発言は、説得力をもってこちらに迫ってこない。宗教、科学に対し、哲学もなにもない、言いつばなしのような空虚な物言いがえんえんつづく。

「道路はね、未来とも繋がっているんだ」と森本はいう。いいことをいっているようで、さっぱり胸に響かない。森本の、著者の描く「未来」が、ただのがらんどろにしか思えないからだ。

『つじもり』の美点は、交差点を守る制度やそこに埋められたまじないのおもしろさ以上に、著者がその物語世界を信じ、愛し、育てていく、脇目をふらないその誠実な筆致にあったと思う。僕は自然と、登場人物ばかりか物語自体のファンになっていた。だからこそ最後の最後、「なにをしはんねん」と、甲子園の阪神ファンのように立ちあがって叫んだのだ。

『つじもり』は、問宮とこの土地の話にしぼるべきだったかもしれない。老人たちと問宮をつないでいた道路、交差点の縁は、ラストの場面では忘れ去られていないか。花井、森本の登場はほんとうに必要だったのか。いまいちど、物語の声に、耳をかたむけてみてほしい。この著者の愛が、隅々まで満ちあふれた次作を、僕はこころから読んでみたい。

『ふくげん屋』は、一読し、おおむねまわりから、好感度の高い作品だろうな、と思った。京都を舞台に、こころの疲れた清楚な女性と、こわれた器の修復にとりくむ誠実な男性が、屋根瓦を縁に出会い、互いにひかれあってゆく。ちょうどよい誤解、距離感を保ちながら、淡いラブストーリーが、いっさいの破綻なくつづく。こうなるだろう、という予想にたがわず、ふたりは恋愛におぼれることなく、ちょうどよい距離のまま、それぞれの未来へと一歩ずつ歩みだす。

読むこと、見ることが、とても好きな著者なのだろうと思う。自分の書いた作品にも、隅々まで目が届いている。ただ、目が届きすぎて、作品が「人工物」に映ってしまうくらいがある。もちろん小説は、ひとの手で書かれるものだ。ただ、物語自体、自由にのびていきたい傾向や、語られたいスピードをも孕んでいる（と僕は感じる）。

とてもよくできた作品だし、読んで不快に思う読者はおそらくいない。けれども読後に「目を通した」以上の印象が残らない。奇天烈なプロットが必要なのも、過激な描写が必要なのもない。作りものでない、そうでしかあり得ない、人間のありよう。ほかの誰がなんといおうと、その作品を書ききろうという、自分でも説明のつかない衝動。書きながら自分を越えていかないと、たぶん、自分以外を引きつける物語はうまれてこない。

『鬼灯』には終始、書き手がみずからのいのちを削って書いている、そんな迫力を感じた。

老境にさしかかったみち江の、おだやかなひとり暮らし。近所に住む、さらに高齢の助岡さんとの、揺れる植物同士のようなふれあい。一見しずかなようでいて、奥には、ひりひりと熱い熾火がくすぶりつづけている。みち江は余人には想像もつかない葛藤を内に抱えているのだ。

みち江だけでない。助岡さん、助岡さんと親しい「棟梁」、みち江の父母、幼なじみのおきちゃん。みながみな、それぞれに葛藤の熾火をそのうちに抱えもっている。著者はその屈託を、ていねいに、けして自分に引き寄せたりせず解きほぐそうと試みる。うつくしく練り上げられた筆づかい、肉声、所作で。

十八で出奔し、祇園に住みつく。それから六十五の年まで、両親が探しにもこず、いっさい連絡が途絶えたまま、という関係が不自然では、という意見があった。が、六十台まで生娘であること、また、助岡さんに浴衣を着せられる描写の切迫感から、そのような不自然さはすべてみち江が引きかぶっていること、そのような重みを抱え、五十年余りを過ごしてきたことが、作中のど真ん中に、まっすぐな視線で描きこまれている。

祇園祭の描写もうつくしい。とくに囃子の描きかたは、目と耳がひとつの穴につながれてゆく思いだ。祭の場面をくたぐたく描写せず、みち江、助岡さんを視座に、七月から八月へ、一気に「飛ばす」場面も粋。

最後に「ときちゃん」と「祇園囃子の稽古を始め」というくだり。直前にきこえる鶯の地鳴きもふくめ、豊かな音響にいざなわれて読んできた作品だけに、「稽古の場面」を描写し、鮮やかな音を響かせてほしかった。そこだけが惜しかった。全編に漂う「この物語を書かなければ消えてしまう」ほどの切実さは強烈な印象を残し、一般部門の応募作のなかでは、まちがいなく抜きん出た作品だと思った。

『カラストロフ』の評価は、選考委員のなかで高かった。物語を「書ききる」熱気、ことばを連ねてゆく疾走感は、たしかに際だっている。過剰さ、不自然さが、十代ならば「自然」になり得る。

目の前5センチだけに焦点を合わせ、「いま」を生ききる。「ひなた」と「こかげ」の視点はそれでよかった。ふたりの微妙なこころの動き、しぐさ、表情をたどる著者の筆致は、まるで目の前でスケッチしているかのように生々しい。ただ、その分、全体をみわたす視線が甘いように思う。

読み返してみて、「プロローグ」は、はたして必要だろうか。また「第四章」は、それまでの切迫した描かれかたにくらべ、時間の流れかた、ことばの張りつめかたが、あまりにも変調してはいないか。「こかげの父」である警官の視点、独白、存在の描写が、うまくいっていない気がする。若いふたりの息づかいがリアルなだけ、こかげの父の存在は、小説の風景を見えにくくさせる、制御されていないノイズのようだ。

著者は演劇に造詣が深そうだ。「病室」を舞台に、「ひなた」と「こかげ」だけを登場させた、密室劇のような小説にすれば、著者の文才、ことばの密度がより生きたかもしれない。十代、二十代のうち、ぜひ次作を読ませてほしい。心底、期待しています。

『天橋立 股のぞき』。ふわふわふしぎに揺れながら、蜃気楼のようにつづく曖昧な時間を、雪哉と夏純の兄妹は息をひそめて生きている。その微妙な揺れを保ちながら、最後までみごとに書ききったバランス感覚に喝采を送りたい。

一文ごとの配置、呼吸、ずらしかたは、真似してできるものでない。自然な、うまれつきの書き手、という印象をもった。ただ、その分だけ、ところどころに見られる、どこから借りてきたような表現が、物語から浮いてしまっている。

想像した範囲のできごとを、ていねいに物語る、そのことはいいのだが、その「想像された範囲」が狭く、また、目に映った表面を描写してゆくだけなので、物語に奥行きが感じられない。「天橋立」という場所だと、なぜこのようなことが起きるのか、その特異性を自分なりにかみくだき、その闊達な文体で自然に伝えてくれるとなおよかった。一作ごとに、劇的に進化する書き手だと思う。ここから次の作品を楽しみにしている。

『夏』については、ハードボイルドタッチの突き放した書きかたが心地よかった。全体をみわたしても、大きな破綻はみられず、自分がどんな作品を書きたいか、そのことを十二分にわきまえた上で書かれている。

ただ、うらがえせば、手持ちのことば、知識を使って、書きたい作品をとりあえず書いてみました、という「試作品」の印象もぬぐえなかった。犯罪は、加害者にとっても被害者にとっても、人間性のもっとも深みが抉られるようなできごとだ。だからこそひとは犯罪小説に引かれ、探偵小説の名作は、展開や結末が知られていようが、長く、広く、読み継がれてきたのだろう。

教室内、部室、通学路での、ささやかな犯罪について、思いを巡らしてみてもはどうだろう。著者ならばきっと、誰も読んだことのない青春×犯罪小説がうみだせる気がする。

『鴨川の詩』。たいへん楽しく読んだ。複数の場面を往き来しながら、よく最後までテンションを保ったまま書き通せたものだ。

登場人物の描きかたは、わりに典型的であるのだが、ごく自然に、なめらかにことばが配置されているので、読んでいて余計なストレスを感じない。一文一文の、そのつなぎの推敲がよくなされている印象がある。

「偶然」が起こりすぎのきらいもあるが、それぞれの帰結を力尽くで引き寄せず、適当な距離をあけたままにしておく、そのさじ加減に品を、センスを感じた。作品全体の風通しがよく、まさしく、鴨川の河原にあぐらをかいて読んでいるかのような、爽快感があった。

ひとつだけ。受賞パーティのシーンが、切り抜き写真をページに貼りつけたように、そこだけ浮いてしまっている。「僕」や「おれ」たちの語り部分に比べ、ことば自体が頼りなく、こちらの内奥にまるで響いてこない。

「わたし」「先生」ら、大人、という存在の実際を、本やドラマでなく、現実の世界でくりかえしよく見てみよう。声も顔も、笑い方も涙の色も、ひとりひとりちがっていること、それぞれかけがえのない美点を持っていることに気づくはずだ。世界を書くためにはまず、世界をよりよく知ってほしい。みずからを広げることが、抜群のセンスをもつ著者の場合、即、作品の広がりには直結する。次作以降も、ここから楽しみにしている。

そして『鴨川ランナー』。

異文化間の軋轢を、これまで誰もみつけることのできなかったことばを駆使し、真正面から、描ききった、超一級の青春小説。読んでいてのめりこみ、というか、ひきずりこまれ、「きみ」の息づかいにいつしか同期し、走り、眠り、頭をかかえ、舌打ちし、笑い、くちびるをかんで歩いていた。すべての描写が生々しく、スリリングで、それでいて絶妙のバランスをもって運ばれていった。

読み終え、まったくあたらしい文学がひらかれた、と思った。大興奮だった。選考会にあたり、事前に提出する資料に「部門とか関係なく、これを『京都文学賞』にしてもよいのでは」と書いて渡した。

著者は「海外部門」にみずからの作品を応募している。それを先回りし、こちらの判断で「一般部門」に引き入れるのは、文学賞の選考のありかたとしてどうなのか、という意見があった。それは、たしかにそうかもしれない。ただ、各選考委員がそれぞれの作品に与える評価点では、十一人すべての選考委員が『鴨川ランナー』に二重丸をつけた。その様は壮観だった。会場で思わず笑いが漏れたほどだった。なにしろ十一個つなぎの団子だ。十一の黒々とした瞳が、作品の向こうから、十一人の選考委員たちを、視線をそらすことなくぐっと見つめている。

この作品には、さまざまな「はざま」が登場する。国籍。文明。都市―田舎。ジェンダー。時間。職業。言語。年代。自他。主人公である「きみ」は、それらすべてのはざまのまんなかで、宙に浮かんでいる。

二度にわたって描写される、「きみ」の原風景ともいえる四条大橋の真ん中で、いわば宙に浮かび、鴨川の流れを見つめる場面は、小説内の「きみ」の存在を、ものの見事に象徴している。

作品中で「きみ」は橋を降り、川に沿ってランニングをはじめのだが（『鴨川ランナー』の所以）、物語の最後で「きみ」は、川におりるのでなく、四条大橋を渡りきり、祇園のほうへ駆けてゆく。頭をさげて。目の前にある100メートルだけに集中して。宙づりをやめると同時に物語が終わる。著者はここまで計算していたのか。していたとすればこんな見事なエンディングはない。していなかったとすれば、著者はまさしく、京都に愛された物語の天使だ。

そのうち、他の委員からも「これが最優秀でいいのでは」という声があがった。あとは一気に雪崩れた。その様は、やはり壮観だった。最高の賞は、応募作中、もっとも優れた文学作品に贈られるべきだ。この上なくまっとうな選考の結果、海外部門応募作品『鴨川ランナー』が、第二回京都文学賞最優秀作品に決まった。おめでとうございます。

## 《選評》 原田 マハ (作家)

第二回京都文学賞の候補作は、いずれ劣らぬ力作揃いで、バラエティに富み、書き手の意欲の高さにうならされることがしばしばありました。

本賞には「一般部門」「中高生部門」「海外部門」と三つの部門がありますが、「部門」という垣根を飛び越えて、最終的には「どの部門から一般部門の最優秀賞受賞者が出てもいいじゃないか」と選考委員全員が納得できる、最も意欲的な作品が選ばれました。



一般・海外部門最優秀賞受賞作『鴨川ランナー』の作者は、アメリカ人のグレゴリー・ケズナジャットさんです。京都へやってきたアメリカ人の主人公が「きみ」という二人称で語られ、この人物を俯瞰する第三者の視点で物語は進行していきます。いわゆる「神目線」で描かれた物語は、少々突き放した感覚がつきまとったものの、客観的な面白さがあり、個性的な物語として成立させるのに役立っています。これといった大きなドラマやエンディングのカタルシスのようなものではありませんが、安定した筆運びで、「きみ」の日本への憧れ、京都に旅する喜びが抒情的に描かれ、時に不条理さやせつなさも盛り込みつつ、読後に深い余韻が残りました。何より外国人とは思えない巧みな日本語の扱いと技術の高さには舌を巻きました。この作者の次回作もぜひ読んでみたい気持ちにさせられ、全会一致で一般・海外部門の最優秀賞に選出されました。

一般部門の優秀賞『つじもり』はテーマがユニークでキャラも作り込まれ、最後まで一気に読みました。『鬼灯』は高い文章力としみじみした筋運びで感動が胸に迫りました。

『凶都夜話』は現代版『遠野物語』のようで短い1話1話を面白く読み進めましたが、どれもが似たような印象でした。『祇園の矜持——モルガンお雪』は大変な意欲作で、史料をよく読み込んで作られていましたが、評伝的だったのが残念でした。『鴨川の水面に光るのは』は、どんでん返しが面白く、最後まで引っ張られました。『ふくげん屋』は金継ぎという日本独自の工芸の技術をテーマにしていたのは良かったです。表現がやや固いのが気になりました。

中高生部門も意欲作揃いでした。最優秀賞の『鴨川の詩』は主人公に感情移入して読み進められ、全編に青春のきらめきが散りばめられていたのが良かったです。優秀賞の『カタストロフ』は十代とは思えないしっかりした筆運びとドラマのツボを押さえている巧みさが断然光っていました。『天橋立 股のぞき』は文体にリズムがあり、情景描写が鮮やかでした。『夏』はこの年代で手練れの刑事物を書く技術をすでに獲得しているのが驚きでしたが、今しか書けないものにも挑戦して欲しいです。

今回はケズナジャットさんが一般・海外部門の最優秀賞を受賞されましたが、外国人で日本語の小説を書く高い技術を持っていたから、ということばかりではなく、やはり物語として素晴らしかったのが選考された最大の理由です。これからも垣根を超えてどんどん新しい才能が本賞から羽ばたいていくことを願ってやみません。

## 《選評》 校條 剛 (文芸評論家)

今年、第二回の選考会は新型コロナウイルス蔓延による緊急事態宣言を受け、オンライン開催となってしまいました。さらに、極めて異例のことですが、海外部門最優秀賞のグレゴリー・ケズナジェットさんの『鴨川ランナー』を一般部門における最優秀賞にもどうか、という提案が選考委員十一人全員の賛成で実現しました。二部門制覇の快挙です。『鴨川ランナー』で最も成功したのは、語り手の「白人男性」を作者は「僕、私」にせず、「きみ」と二人称で半ば他人のように突き放して描いたところにあると考えます。日本語と日本人と京都に惹かれながら、その心のありかたがどこに起因するのを探し求める魂の遍歴が描かれていて感銘を受けました。



一般部門では、最高点評価が多かった『鬼灯』。脇役の助岡さんの臨終の言葉「おもろかったあ。上出来や」がいつまでも胸中に残ります。その味わい深い人生観を十分に尊重しながらも、あまりに古風すぎる作柄に一票を投じるのがためられました。

『つじもり』はなによりも読み手を引っ張る勢いがありました。「道路愛好家」である主人公が、どうして道路をほじくり返すのかという疑問や、ラストの逃げるような終わり方など、改稿を望みたい部分はいくつかあります。しかし、「交差点管理人」になって受け持ちの交差点の価値を高めていくといった奇想のアイデアを快腕で推進する筆力には十分、将来の期待が持てると思いました。新人賞に相応しい作品と考えた所以です。

『祇園の矜持——モルガンお雪』も力作でした。この実在の女性について、作者が選んだ方法は、憲兵の尋問に答えて、己れの生涯を物語るという形です。それは成功していると感じましたが、全編説明口調が勝っているせいで人物が紙上に立ち上がってこないうらみがありました。

『鴨川の水面に光るのは』は、ラストのドンデン返しを狙って構想された作品で、ストーリーの全てはドンデン返しの成功のために捧げられています。しかし、そのために展開も人物造形もいささか生ぬるい印象を受けました。ドンデンのための伏線は巧妙に張られていましたが、一点肝心な伏線が忘れられていたのは残念でした。

『凶都夜話』は、工夫に溢れた楽しい読み物でしたが、プロ作家の手遊びの印象が強く、新人賞作品ではないと感じました。

『ふくげん屋』は丁寧に描かれた誠実な作品で、好感度は高いです。しかし、人物の魅力がいま一つであるのと、ドラマの盛り上げ方が大人しすぎた点に票を集められなかった原因があると考えます。

中高生部門に移ります。実は、この部門の評価の難しさに今更ながら気付かされた第二回でした。どこまで、作者の年齢を勘案するのかという評価軸に悩まなければならなかったからです。中高生を見くぶり過ぎてもいけません。十分に大人の感覚と技量を持っている可能性もあるのです。また、中高生とひとカタマリにしていますが、中学生と高校生とでは成長度合いがまったく違ってきます。

考慮の末に、私の基準は、あくまでも「リアリズム」にあると再確認しました。たとえ、ファンタジー作品であっても、基本的なリアリズムが無視されていれば、高い評価はできないという基準です。村上春樹氏もファンタジー作品での描写のコツは、リアリズムを貫くことと語っています。

候補作の初めは『カタストロフ』。本部門ではこの一作のみを推しました。「余命二ヶ月」の娘の父親の描き方は乱暴に過ぎるという指摘はその通りだと思いますし、せっかくの盛り上がりには水を差すようなラストの「落ち」も納得しがたいものがあります。しかし、主人公の二人「ひなた」と「こかげ」の交流には類型表現を飛び抜けた「真実」が表わっていて、私の感動は大きかったです。

『天橋立 股のぞき』。よくあるファンタジーに見えますが、アイデアそのものには独創性が感じられます。ただ、描写が少なすぎて損をしています。本棚が倒れてきて、隠し扉が現われるときに、本棚に詰まった本はどうなりますか。こういう箇所もしっかりフォローしてほしいです。

『夏』。警察小説のファンなのでしょうか、捜査の実際はよく書けています。しかし、犯人や犯行動機などが明らかになる後半は腰砕けでした。せっかく暗号を登場させたのですから、その解説部分を読みどころにするべきだったでしょう。

『鴨川の詩』。この部門で最優秀賞に決まった作品ですが、私は低い評価しかできませんでした。幾つもの小さな章の語り手はその都度変わりますが、固有名詞を使わず、誰が誰であるのかを意識的に分からないようにしています。ミステリーなどでよく使われる手法ですが、この青春小説では、読者に過剰な負担をかけるだけではないでしょうか。また、尊敬する父親から指輪を奪い取って、鴨川に放り投げる、というエピソードはストーリー上の都合であって、リアリズムとは相容れないと考えます。同様の疑問を他の箇所にも感じましたので、本作を推すことは到底不可能でした。

海外部門では、冒頭に述べたとおり、『鴨川ランナー』が全委員の高評価を得ての受賞です。応募作品が少なくても、質の高い作品に恵まれることがあるという証明になりました。